

以東尺遺跡II

筑紫野市大字筑紫所在遺跡調査

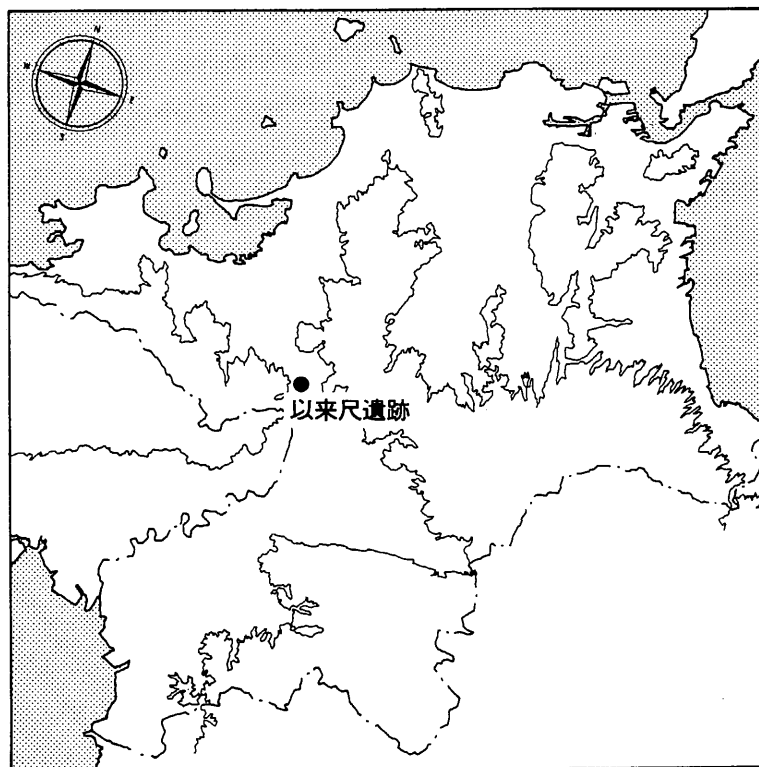
筑紫野市文化財調査報告書

第 39 集

1 9 9 4

筑紫野市教育委員会

以来尺遺跡II



序

筑紫野市は福岡市・久留米市のほぼ中間にあり、古代より交通・経済・流通の要所として発展して来ました。市内には数多くの遺跡があり、古来より先人の多く居住するところで歴史に育まれた土地であるといえます。市の南部では大規模な区画整理事業が進み、一部の自然を残して新しい住宅地となり、北部では旧来からの町並にマンション等の高層建築が目立って増えてまいりました。新しい営みの始まりに、先人の足跡^{そくせき}が消されていくのは、過去から現代へくりかえし行なわれてきたことではありますが、先人の足跡を伝えていくことが私達の大きな役割でございます。しかしながら、日々、調査に追われ整理・報告が遅れている現状ではありますが、それらの成果を少しでも早く刊行いたしたいと努力いたしております。

本書が、郷土の文化財に対する関心を深める一助にでもなることができますればと願いますとともに、発掘調査や報告書作成にあたって御理解・御協力をいただきました関係各位に対し深くお礼を申し上げたいと存じます。

平成6年3月31日

筑紫野市教育委員会
教育長 永渕 正敏

例 言

1. 本書は筑紫野市大字筑紫914-1に所在する遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は学校法人「橘学園」の寄宿舍の増築工事に伴い、筑紫野市教育委員会が実施した。
3. 隣接地は現在、福岡県教育委員会により埋蔵文化財の発掘調査が進められているが、同一遺跡内に含まれるため、この調査地点を以来尺遺跡Ⅱとした。
4. 現地での実測・写真撮影は渡邊和子が行なった。
5. 遺物の復原は井上惇子・村上喜代・大平繁子・竹田スミ子・林田由美が行ない、写真撮影については、フォトハウス岡に委託し撮影した。
6. 出土遺物の実測ならびに製図は、渡邊が行なった。
7. 挿図中の北は磁北を示す。
8. 遺物の挿図番号と図版番号は同一であり、遺物写真の大きさは不統一である。
9. 執筆・編集は渡邊が行なった。

本文目次

	頁
I. 調査に至る経過	3
II. 位置と環境	4
III. 調査内容	5
1. 住居跡	5
出土遺物	5
2. 土壌	9
出土遺物	11
3. その他の遺構	13
IV. まとめ	13

插图目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (S 1 / 25,000)	1
Fig. 2 調査地点位置図 (S 1 / 2,500)	2
Fig. 3 上層遺構配置図 (S 1 / 100)	6
Fig. 4 下層遺構配置図 (S 1 / 100)	6
Fig. 5 1・2・3号住居跡実測図 (S 1 / 60)	7
Fig. 6 出土土器実測図 (S 1 / 2・1 / 4)	8
Fig. 7 土壌出土石器実測図 (S 1 / 2)	9
Fig. 8 土壌実測図 (S 1 / 30)	10
Fig. 9 出土土器実測図 (S 1 / 3・1 / 6)	11
Fig. 10 その他の遺構出土土器実測図 (S 1 / 2)	12

図版目次

PL. 1 遺跡遠景
PL. 2 全景写真 (東側・南側より)
PL. 3 住居跡
PL. 4 土壌
PL. 5 住居跡出土土器
PL. 6 土壌出土遺物
PL. 7 その他の遺構出土土器



- | | | | | |
|-----------|------------------|----------|---------|----------|
| 1. 大牟田西遺跡 | 2. 大牟田東遺跡 | 3. 永岡遺跡 | 4. 常松遺跡 | 5. 以来尺遺跡 |
| 6. 原田宿跡 | 7. 原田地区・隈・西小田遺跡群 | 8. 五郎山古墳 | | |

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (S 1/25,000)

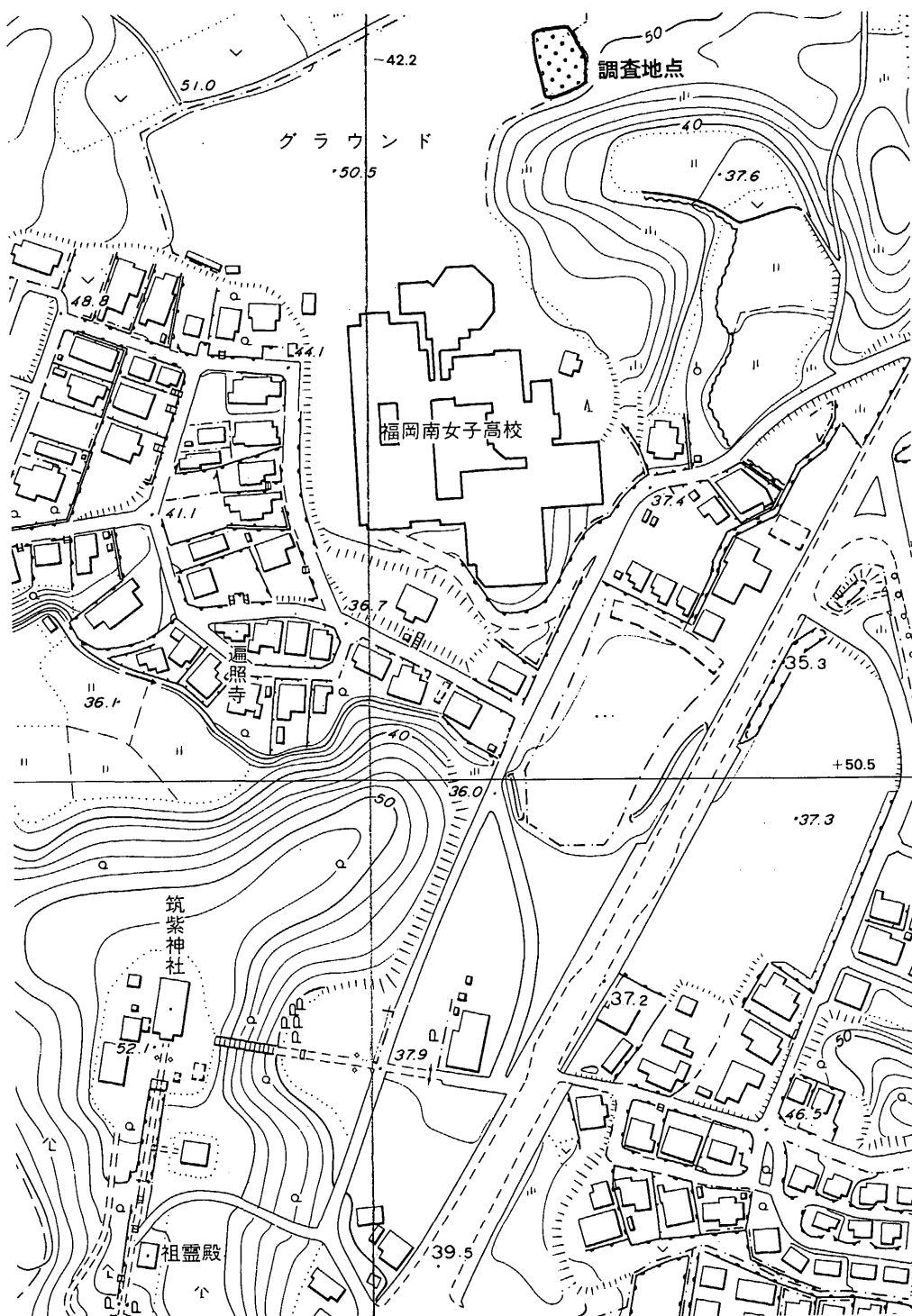


Fig. 2 調査地点位置図 (S1/2,500)

I. 調査に至る経過

平成3年9月17日、筑紫野市教育委員会へ市内大字筑紫901番地の学校法人「橘学園」福岡南女子高等学校寄宿舎増築を計画中である旨の埋蔵文化財の有無の照会がなされた。

当該地は周知の遺跡にあたることから、試掘調査を平成4年1月18日に実施し、中世および弥生時代の遺物の包含層が存在するのを確認した。

その後、平成4年2月17日に本市都市計画課へ都市計画法第32条による開発行為の本申請が提出された。申請者に試掘結果をふまえて、周知の遺跡が所在し事前に発掘調査の必要性を通知した。また平成4年4月27日付で文化財保護法第57条の2項の届出が提出なされ、あい前後して「橘学園」福岡南女子高等学校より発掘調査についての依頼がなされた。再度申請者と協議を行なったが、寄宿舎建築終了を新年度入学時には間にあわせたいとの意向が強く、発掘調査については文化財担当内部で協議をし、回答することとなった。発掘調査は当時発掘途中の調査が完了しだい、当該地の調査にはいることとし、平成4年10月21日付で埋蔵文化財発掘調査の委託契約書を締結した。同年10月29日、文化財保護法第98条の2項の通知を文化庁へ提出し、11月2日より現地調査を開始した。

また整理および報告書作成の作業を平成4・5年度にわたって実施した。

発掘調査の組織

平成4年度（発掘調査）

調査主体	総 括	教 育 長	永 淵 正敏
	庶 務	教 育 部 長	岡部隆太郎
		社会教育課	課長 竹田 征治
		文化財担当	係長 山野 洋一
			技師 渡邊 和子
	試掘調査		主事 奥村 俊久
	発掘調査	筑紫野市教育委員会	社会教育課 技師 渡邊 和子

平成5年度（報告書作成）

総 括	筑紫野市教育委員会	教 育 長	永 淵 正敏
庶 務	筑紫野市教育委員会	教 育 部 長	永 田 晋一
		社会教育課	課長 黒田 未宣
		文化財担当	係長 山野 洋一
			技師 渡邊 和子
報告書担当		社会教育課	技師 渡邊 和子

Ⅱ. 位置と環境 (Fig. 1・2)

以来尺遺跡は、福岡県筑紫野市大字筑紫に所在する。

福岡平野と筑後平野の接点部、背振山系より東に派生する低丘陵地に立地する。この低丘陵群の東側には筑後川と合流して有明海に注ぐ宝満川があり、この宝満川の中流域西岸は無数の小谷や沢によって多くの丘陵にわかれ、複雑に入りくんだ地形を形成する。この宝満川中流域の丘陵部には旧石器時代から歴史時代に及ぶ各時代の遺跡が数多く群集している。

遺跡の立地する地域は当市の南部にあたる。この地域も福岡都市圏に隣接しているため、大規模な開発「小郡・筑紫野ニュータウン」構想や区画整理事業によって大きく様変わりし、さらにこれらの事業に伴う発掘調査によってこの地域の古代の全容もしだいに明らかになってきている。

調査地点は「橘学園」福岡南女子高校の敷地内で、筑紫野バイパスに伴う発掘調査の行なわれている以来尺遺跡の一部に含まれる。バイパスに伴う調査では、15～16Cの大溝・土塁、弥生時代後期の住居跡が数多く検出されて、この周辺での弥生後期の拠点的な集落であると考えられる。

この周辺の弥生時代の遺跡を概観すると、北1.2kmの所に集落と墓地の共存する常松遺跡^{註1}、1.8kmに墓地群の永岡遺跡^{註2}、東南2kmには弥生時代中期前半から後期初頭にかけての大墓地群と集落跡をもつ隈・西小田遺跡群があり、この中でも第3地点と呼ばれる所から弥生中期前半に比定される甕棺から細形銅剣・ゴホウラ製貝輪が出土、また第13地点では中期後半に比定される甕棺より重圈文昭明鏡・鉄戈・鉄剣・ゴホウラ製貝輪を右に20個、左に21個装着したものも検出されている。

古墳時代には前述の隈・西小田遺跡群の第6・10地点に前期の古墳が出現し、さらに古墳時代中期には、第8・10地点から初期須恵器の窯が確認された。後期には丘陵上に占地される横穴式古墳の他に丘陵斜面に位置する横穴墓などが出現する。隈・西小田地区と隣接する原田地区には装飾古墳として有名な国指定五郎山古墳やニュータウン事業に伴って調査された古墳も点在していた。

南0.3kmには延喜式にその名を残す筑紫神社がある^{註3}。さらに、南0.7kmには近世長崎街道の筑前六宿のひとつ原田宿がある。この宿場は大正時代の火災により全容が不明確であったが原田駅前区画整理事業に伴う発掘調査で次第に全容が分かりつつある。

以来尺遺跡は、このように古代から近世まで繁栄していた地域の中に含まれていたといえる。

註1. 福岡県筑紫野町常松遺跡報告書 1970 別府大学文学考古学研究室報告書1

註2. 福岡県南バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第4・5集 福岡県教育委員会
永岡遺跡 筑紫野市文化財調査報告書 第6・26集 筑紫野市教育委員会

註3. 現在のこる最古の資料は「筑紫宮縁起」及「棟札」に享徳2年(1453)に神殿を建立とある。

Ⅲ. 調査の内容

調査地点の層序は、試掘調査の所見によれば、1.2m強の客土、その直下に0.2mの耕作土及び床土、その下に遺構・包含層の順に確認。これをうけて客土、耕作土の剝土を開始したが、調査区の南側部分は客土直下に遺物が出土したため、この面で遺構検出することとした。このため調査区部分は耕作土、床土が削平されていることが明確になり、この面を上層、以下の遺構検出面を下層として、それぞれ調査を行なった。上層部では溝4条及びピットが多数検出された。また下層では上層の溝に重複して住居跡3軒・土壇4基・ピットを検出。ピット群は建物跡としてまとめるのはなかった。

1. 住居跡 (Fig. 5、PL. 3)

調査の南東部で溝1～4に切られて検出された、1号住居跡は南東側のプランが調査区外になるが、3.7～3.2mのやや不整形な長方形を呈す。またこのコーナー付近は1号土壇に切られる。壁高は最大30cm遺存し、床には10～15cm程度の貼床が認められた。北側の短辺中央部には1.2×0.5mの深さ50cmの不整形な屋内土壇をもつ。2号住居跡は1号住居跡に切られ、プランは隅丸方形気味で、壁高は最大40cmを測る。東側には断面逆台形状の壁溝をもつが全周はしない。溝3～4に切られる3号住居跡はプランは不整形で東西2.5m、南北3.0mの大きさを測る。1・2号に比べると明確なプランにはならないが、平坦床面をもつものと考えて一応住居跡としてとり扱った。出土遺物は、いずれも細片が多く図示しえたのは1号住居跡出土のみである。

出土土器 (Fig. 6、PL. 5)

2・4・5・11・13～19は住居跡の埋土上面からの出土。9はピット1からの出土である。1～6は甕の口縁部片で1～3・5は著しい磨滅のため調整は不明。胎土は1がわりに精製されているが、2～5までは細砂粒が多く含まれる。4の外表面器表は剝落しているが部分的にハケ目が施され、内面の頸部直下には部分的だが指頭痕が顕著に残る。口縁端部にはわずかに凹みをもつ。6は外面の頸部直下に三角凸帯が一条めぐり、胎土には少量の細砂粒が含まれ、口縁部から凸帯まではナデ調整がなされている。7は複合口縁壺形土器の口縁部で、焼成はあまく器表が剝落しているため調整は不明である。口縁部の屈曲は緩く、端部は丸くおさめ、頸部から肩部にかけては緩やかに外下方へのびる。8は器表剝落のため調整は不明であるが、淡茶褐色を呈し、胎土は精製された器台の裾部片である。9は細砂粒の多く含まれた甕の底部で内面に指頭痕をウッスラ残す。10の胎土には少量の細砂粒が含まれ、内面淡灰黒色、外面淡茶褐色を呈す。11の外面は器表剝落して調整は不明だが内面には、こげが附着し指頭痕を明瞭に残している。12は砂粒が多く含まれ焼成の悪い底部片で器表剝落のため調整方法は不明、16の底



Fig. 3 上層遺構配置図 (S1/100)

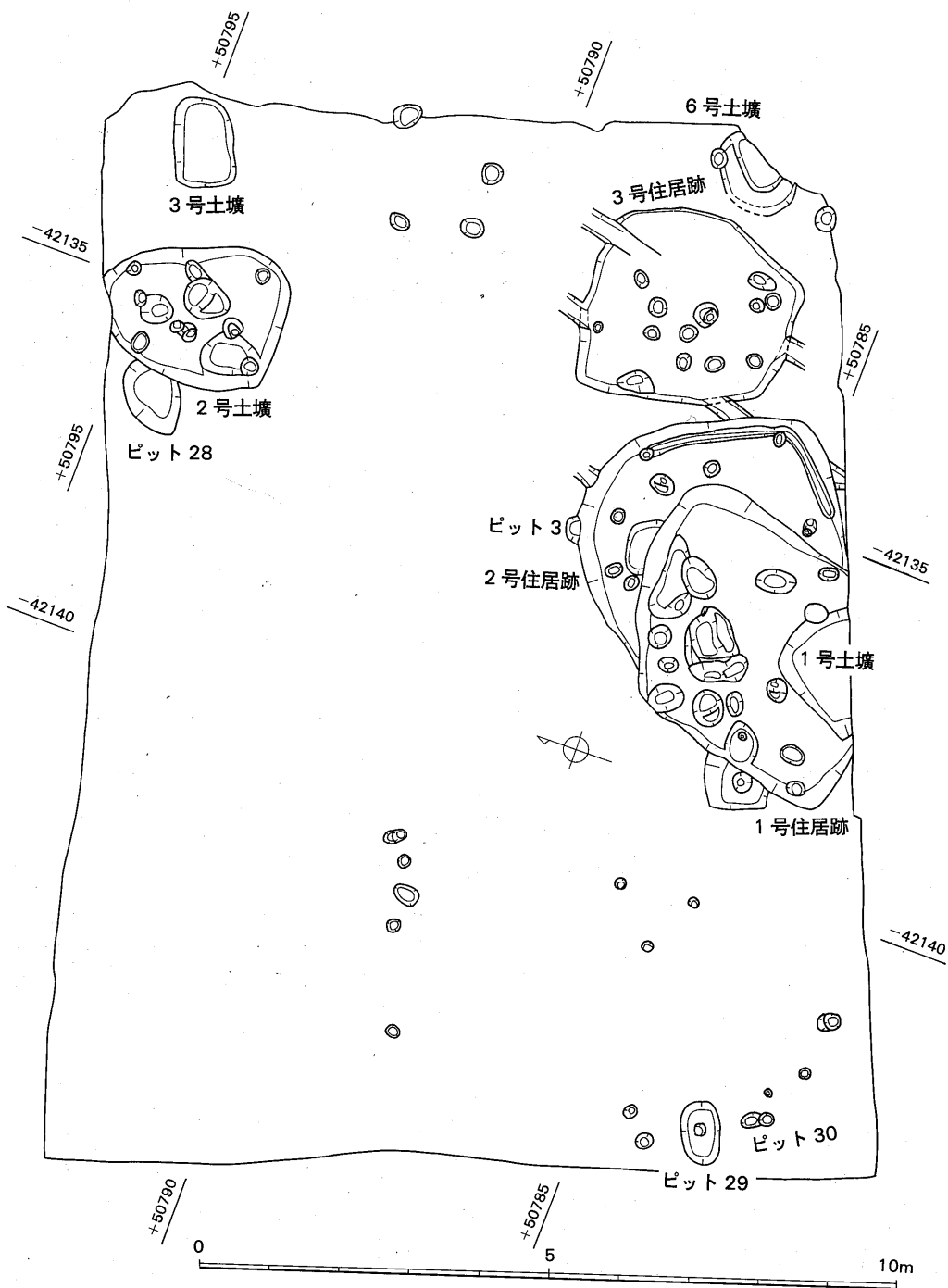


Fig. 4 下層遺構配置図 (S1/100)

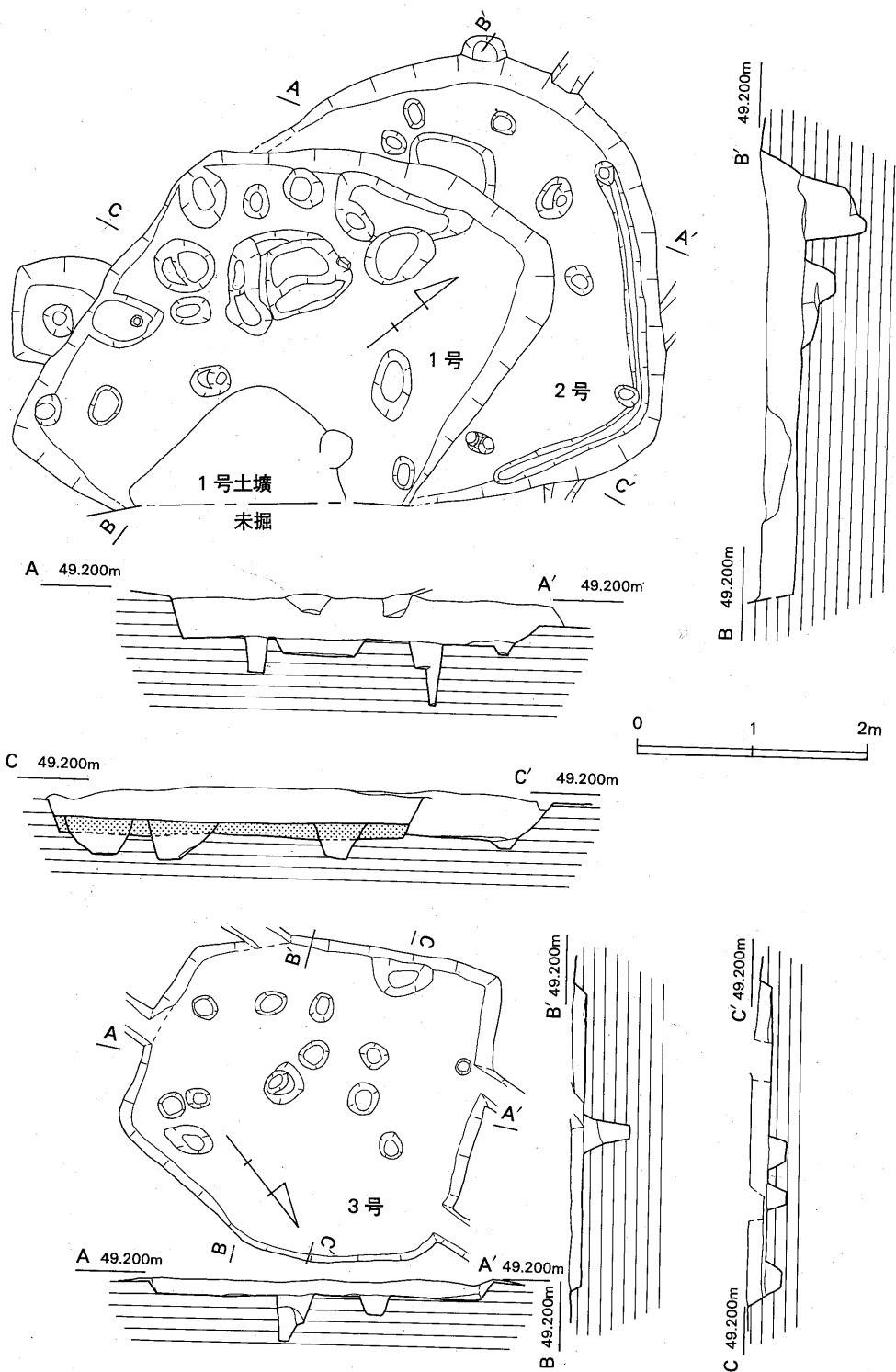


Fig. 5 1·2·3号住居跡実測図 (S1/60)

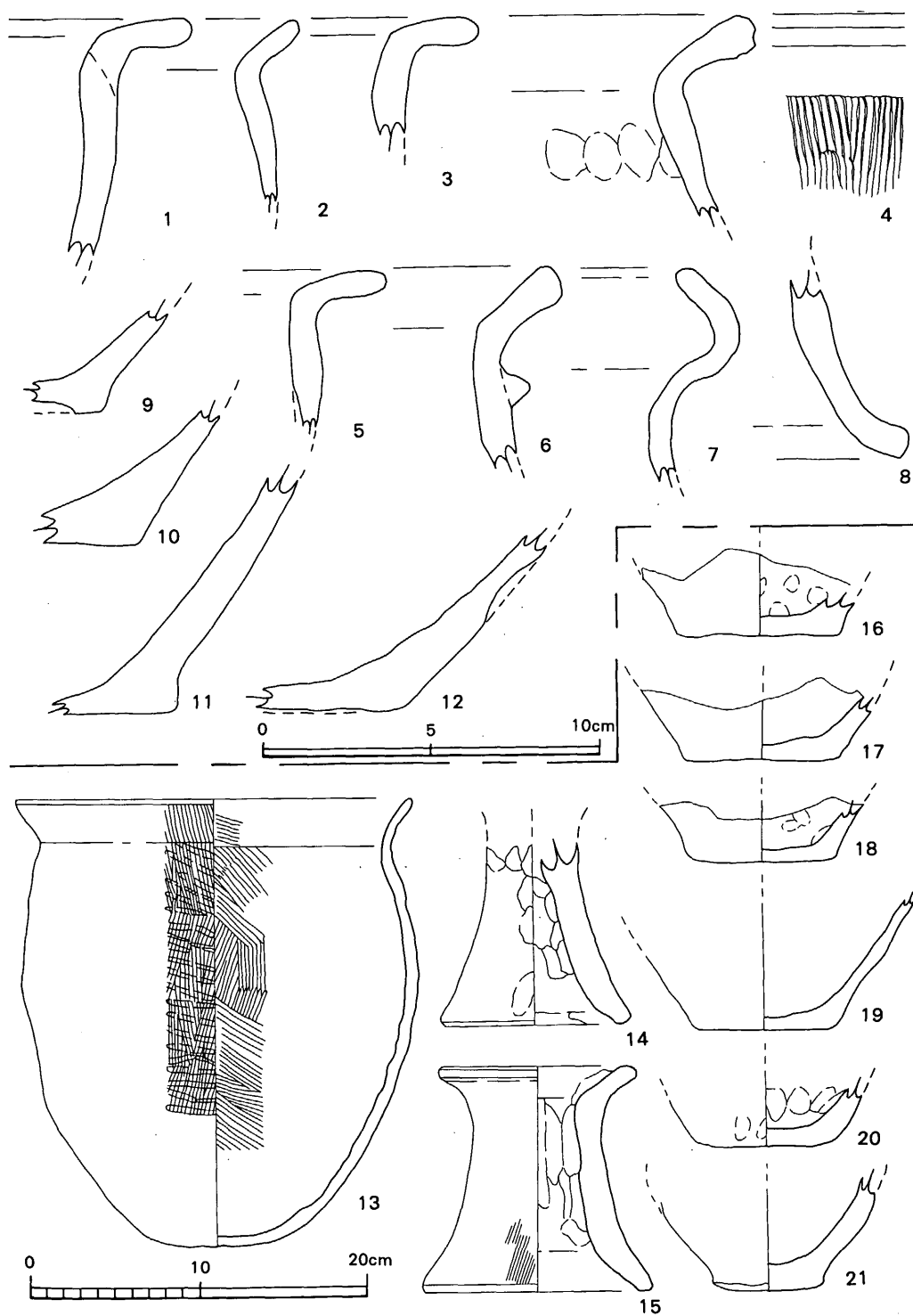


Fig. 6 出土土器实测图 (S1/2·1/4)

部は内外面ともに淡黄褐色を呈す、焼成の悪いもので胎土には細砂粒が少量含まれる。内面と裏面には指の痕が明瞭に残っている。17の胎土にも細砂粒が僅かに含まれる。18の外表面は器表剥落のため調整は不明だが、内面にはこげが附着し、ウッスラと指頭痕を残す。胎土は1~3mmの砂粒が多く含まれる。19は焼成の悪い甕の底部片で、胎土には細砂粒が少量含まれ内面淡褐色、外面淡橙色を呈す。20の胎土は雲母片も混じり、1~5mmの砂粒を多く含んだ甕の底部片で内面は指による調整の後、ナデ調整を施している。外面は磨滅しているもののウッスラと指頭痕を残す。21は壺の底部片で胎土には細砂粒を僅かに含む。全体的に磨滅が著しく調整は不明。灰褐色~淡茶褐色を呈す。13は復原口径23.4cm・器高26.6cm・胴部最大径23.4cmを測り、口縁部は緩く外反する。底部は凸レンズ状を呈し、やや丸底気味である。全体的に磨滅しているが底部内面は指頭整形後ナデ、胴部は指による整形のあとハケによる調整が施されている。外面の頸部屈曲部から胴部中位までは、タタキの後ハケ目調整を施し、胴部下位から底部まではナデ調整されている。口縁部は内外ともにハケによる調整を施す。淡茶褐色~淡褐色を呈し、胎土には少量の細砂粒が含まれる。14はやや細くスリムな形状の器台で、復原裾部11.2cmを測り、端部は丸みをもつ。調整は磨滅のため不明瞭だが、内外共に指頭の痕が残る。胎土には細砂粒が少量含まれるも焼成は良好である。15は復原受部径11.6cm・台裾部径13.5cm・器高13.4cmを測る。全体的に磨滅しているため調整は不明瞭だが外面は受部と裾部をのぞきハケ目調整がされ、受部と裾部はナデ調整で仕上げている。内面は全体的にナデによる調整だが指頭痕が残る。胎土には5~6mmの砂粒が多く含まれるが焼成は良好である。14・15いずれも埋土上層からの出土。

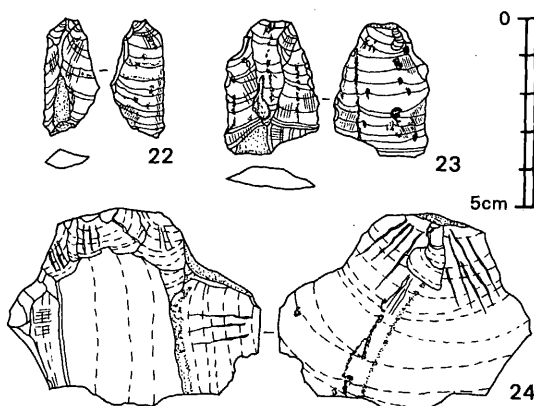


Fig. 7 土壌出土石器実測図 (S1/2)

2. 土 壙 (Fig. 8、PL. 4)

1号土壙は東側が未掘で1号住居跡をきって検出された。西辺1.6m、北辺で1.5mを測り隅丸長方形を呈すものと考えられる。出土遺物は検出面より底面まで、かなりの量検出された。出土状況は西側から東側へと層序をなす。壁高は30cmで遺存は悪いと思われる。2号土壙は不整台形を呈する、やや大型の土壙で北西側の一部が未掘で溝1に切られる。底面は平坦をなし、大小のピットを有する。コーナー付近に同様の大きさ、深さをもつピットをもつことから小型の住居跡の可能性も考えられるが、一応ここでは土壙としてとりあつかった。コーナー部のピットは径20~30cmの円および楕円形で深さ20cm前後を測る。出土遺物は土器が数点で、いず

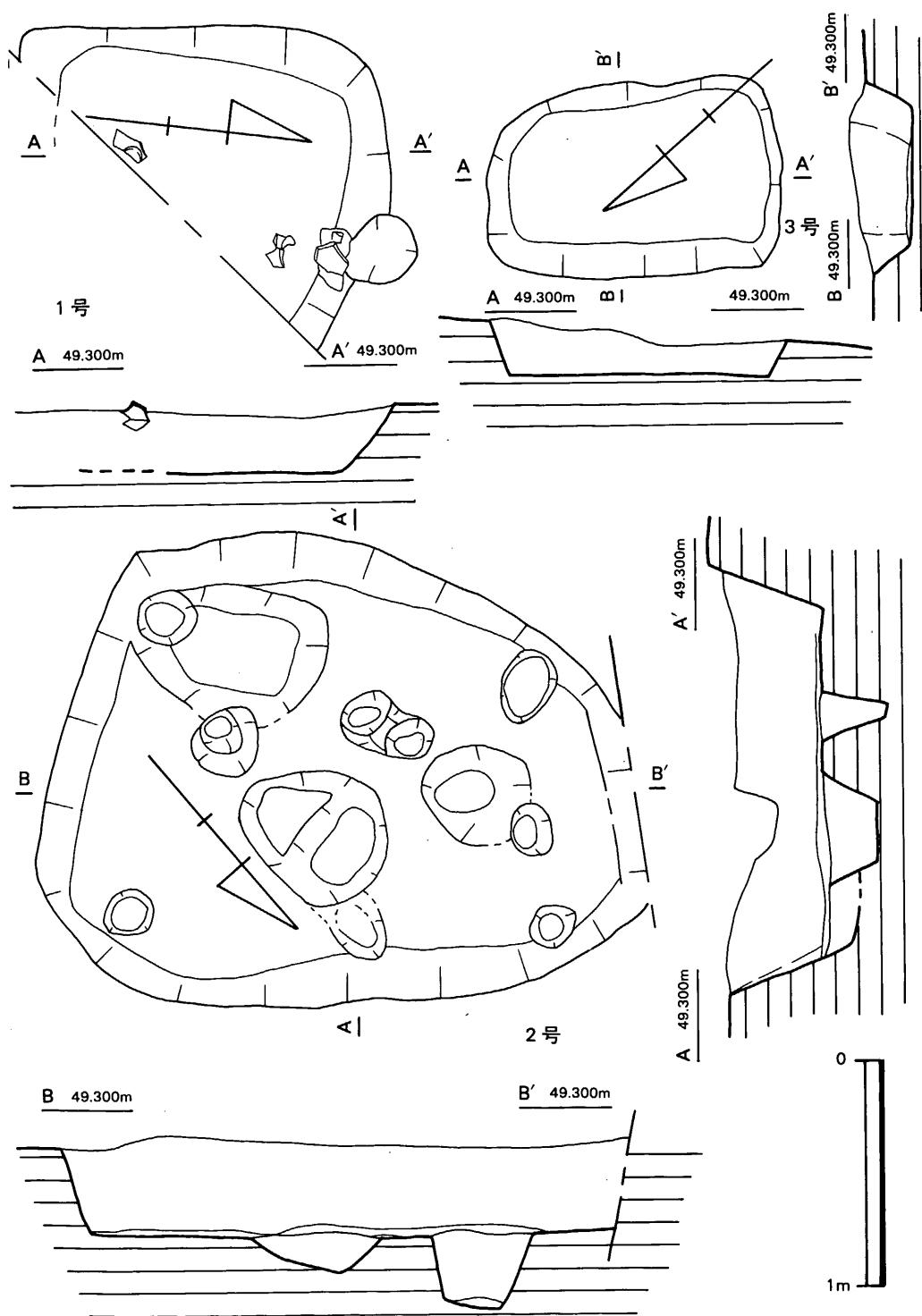


Fig. 8 土壇実測図 (S1/30)

れも実測可能なものは含まれていなかった。3号土壇は調査区の北東側で検出されたもので現存1.3m×0.8mのやや不整形な長方形を呈する。壁高は22cmとやはり遺存状況は悪い。

出土遺物 (Fig. 7・9、PL. 6)

22・23・24～27は1号土壇出土、24は2号土壇出土である。22・23は腰岳産の黒曜石の剝片で表面に表皮を残し、素材自体も気泡がはいり質は悪い。23の打面は平坦な自然面の打面。いずれも側辺部に使用痕が認められる。24の素材はサヌカイト。パティナの進んだもので平坦な自然面を打面としている。

側辺部には使用痕がある。24は複合口縁壺の口縁部で、胎土には細砂粒が多く含まれるが、焼成は良好。口縁部の屈曲は緩く、端部は丸くおさめ頸部から緩やかに外下方へのびる。さらに屈曲部下に凸帯が一条めぐる。磨滅しているが部分的に丹をのこしている。25は甕の底部で胎土には少量の細砂粒が含まれる。器表剝落のため調整は不明瞭だが底面に指頭痕を残す。26は復原口径31.9cm・現存器高26.9cmを測り、胴部下半を欠損する。口縁部は「く」の字よりやや強く外反し端部は丸くおさめ胴部中位に最大径をもつ。磨滅のため調整は不明瞭。胎土には砂粒が多く含まれるが焼成は良好である。27は複合口縁壺で胴部下半を欠損する。胎土には細砂粒が多く含まれ、焼成は普通である。肩部に二条胴部に一条の鈍い凸帯をもつ。丹塗りの痕跡がある。

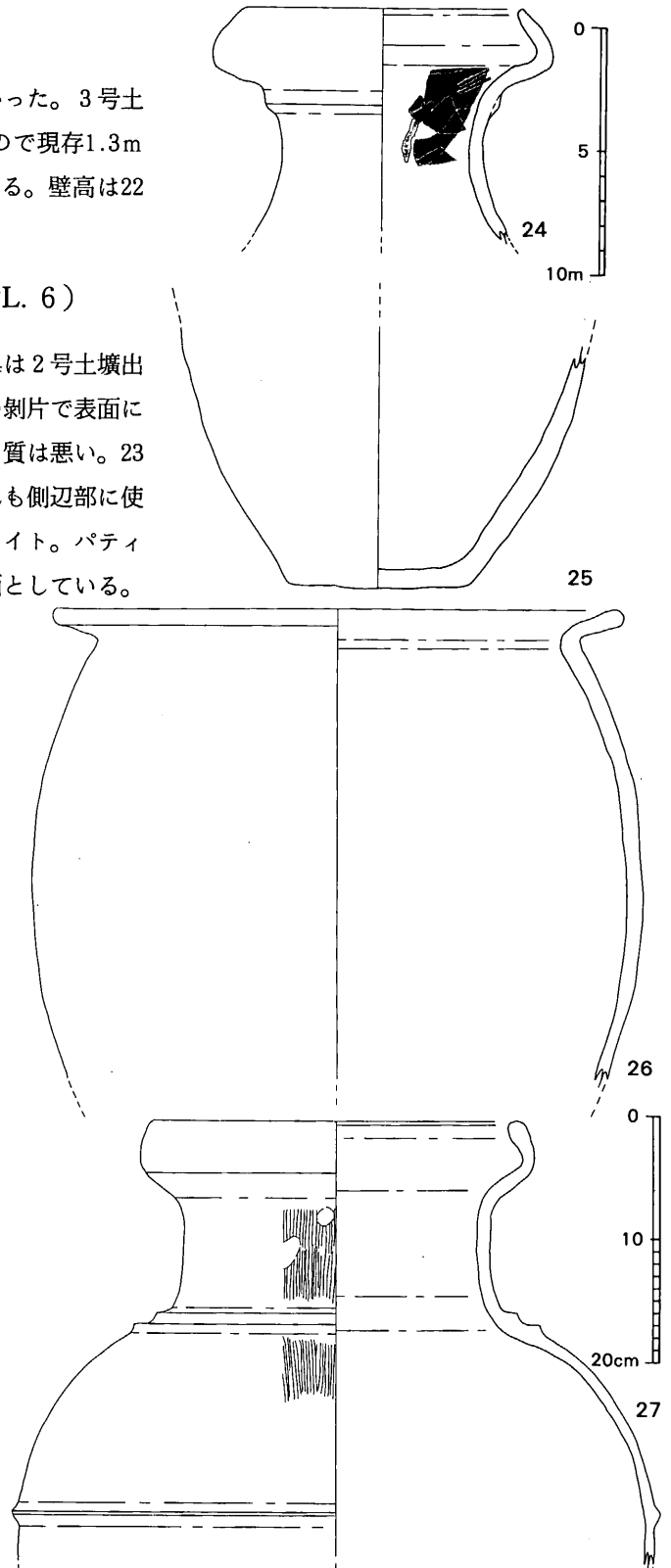


Fig. 9 出土土器実測図 (S1/3・1/6)

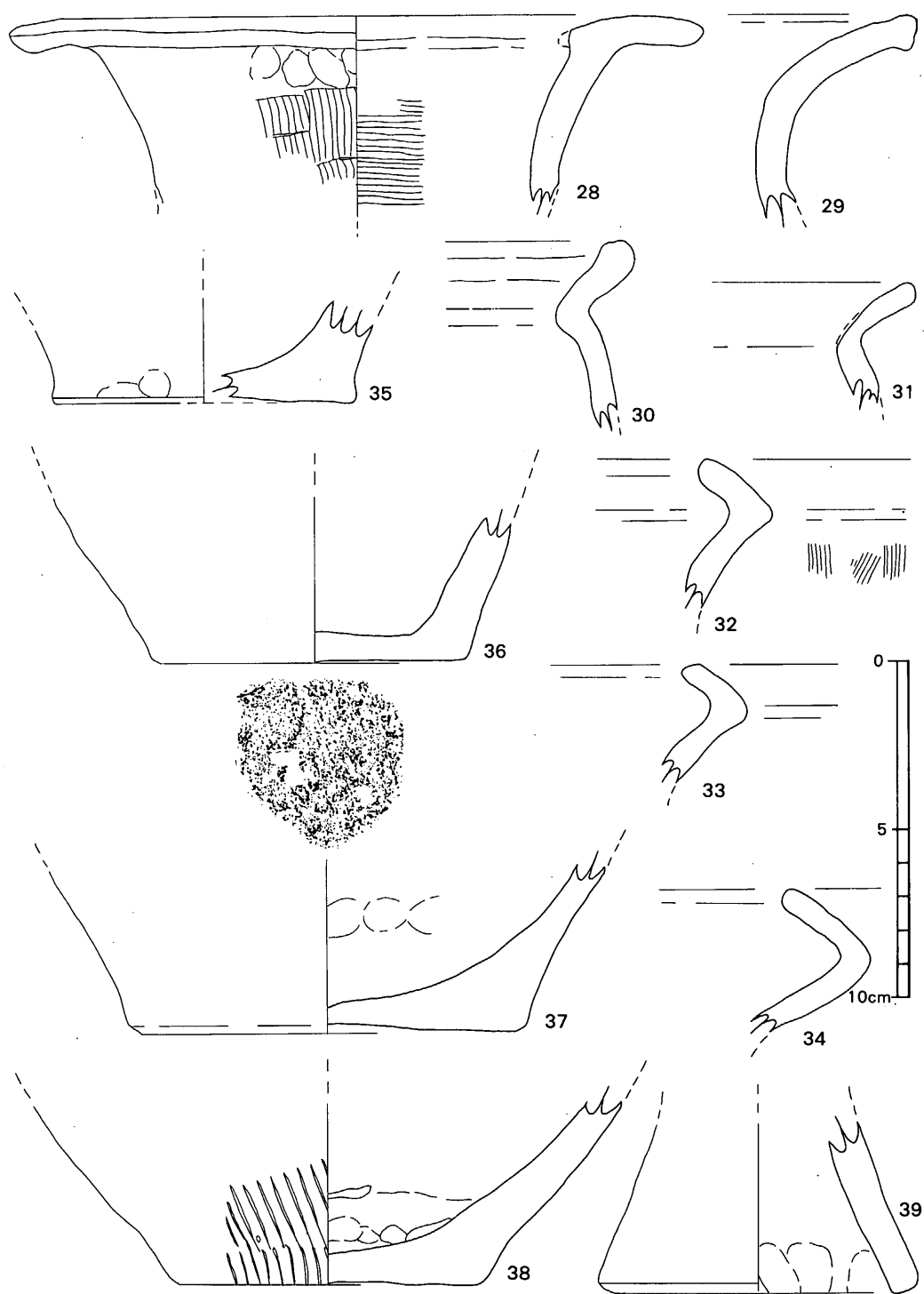


Fig. 10 その他の遺構出土土器実測図 (S1/2)

3. その他の遺構 (Fig. 3、PL. 2)

調査区の東側で検出されたほぼ南北に平行して走る4条の溝は、いずれも深さ10cm前後、断面は逆台形を呈す。県の調査区へさらに延びる可能性をもつ。現時点では他の遺構との係わりなど不明である。ピットもかなり検出されたが、建物跡としてまとまるのはなかった。土器の出土したピットはかなりあるが、ここでは土器のみを掲載することとした。

出土土器 (Fig. 10、PL. 7)

28は壺の口縁で鋤先状口縁をもつ。磨滅のため不明瞭だが内外面に部分的にハケ目調整の痕跡を残す。内面淡橙色、外面淡黄褐色を呈し、胎土には細砂粒を少量含む。29も壺の口縁で頸部はやや直立ぎみに立ち上り、口縁部は湾曲ぎみに外反する。胎土は精製、焼成は良好。30・31は甕の口縁。30は「く」の字状に外へ開き端部を丸くおさめている。31は緩く「く」の字に開く。ともに胎土には細砂粒が含まれ、焼成はややあまい。32～34は複合口縁壺の口縁。いずれも磨滅のため調整は不明瞭。32の外面にだけ部分的にハケ目の痕跡が残る。34は胎土が精製され焼成は良好で、部分的に丹塗りの痕跡をのこしている。32・33は頸部から緩やかに続き、口縁部へと内傾する。34の内傾は32・33より強い。35～38は甕の底部片。底部はいずれも凹レンズ状を呈すが、36だけがやや平底に近い。35の胎土には細砂粒が少量含まれる。内外面淡茶褐色を呈し、雑な指頭による整形がなされている。36は少量の細砂粒が含まれ焼成は良好、底外面に木の実の圧痕が残る。38の胎土には細砂粒が少量含まれ焼成は普通。磨滅しているが部分的に粗いハケ目調整の痕跡をのこす。39は器台で復原裾部9.5cmを測る。29・31・36は1号溝、28・30・38は20、32・39は33、33は31、34は17、35は25、37は2のピットからの出土である。

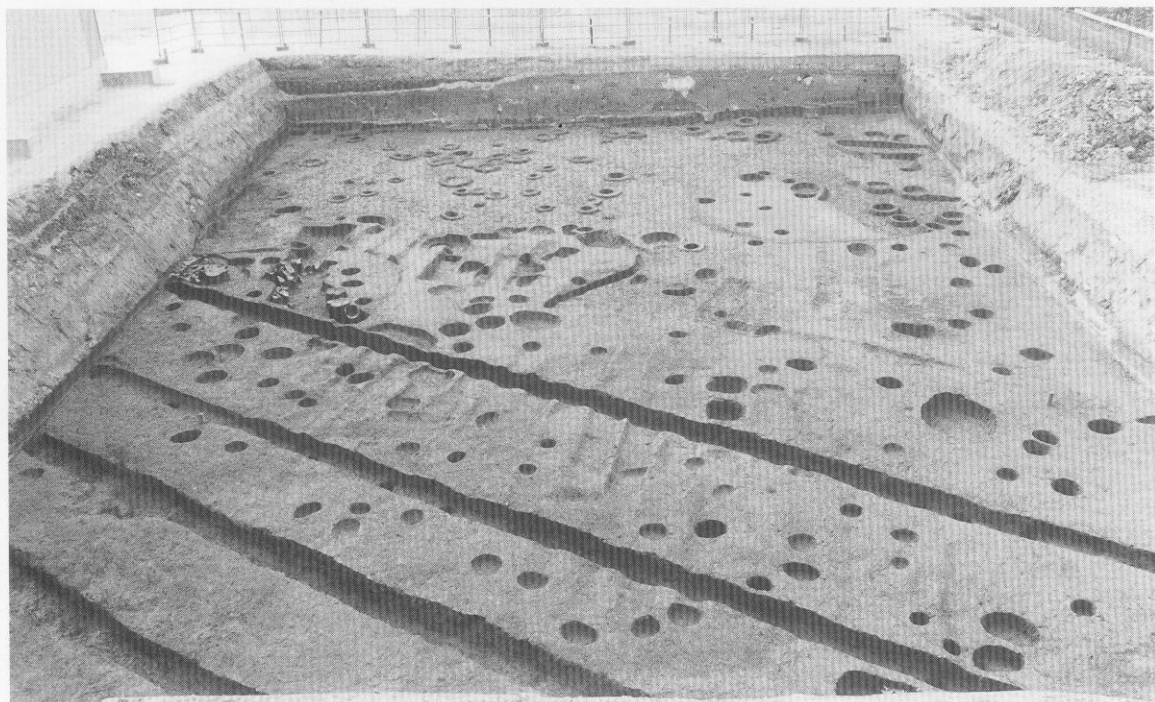
IV. ま と め

今回の調査区は県教育委員会が現在調査中の集落址のすぐ横に隣接するにもかかわらず、遺構の重複度は少ない。さらに検出された遺構の壁高は遺存の良好なものはやはり少ない。剝土中の所見では耕作土直下より、かなりの遺物の出土が認められることなどから隣接地に比べるとかなり削平を受けていたものと考えられる。前述の様に調査区は以来尺遺跡のごく一部にすぎず検出された住居跡・溝なども集落址の一部として捉えることが最適と思われるので、いずれ県教育委員会調査の南バイパス関連の成果が報告されたときに、ここで検出された遺構の性格などが明らかになるものと思われる。また位置と環境で述べた様に隈・西小田地区遺跡群には弥生時代の大墓地群と集落址がある。この調査に係った者として当時の記憶では集落址の時期的な主流をなすものは弥生時代中期と思われる。以来尺遺跡が後期の拠点ならば集落の時期的な占地の変遷など興味深いものがあり、一日も早い報告書の刊行が望まれる。

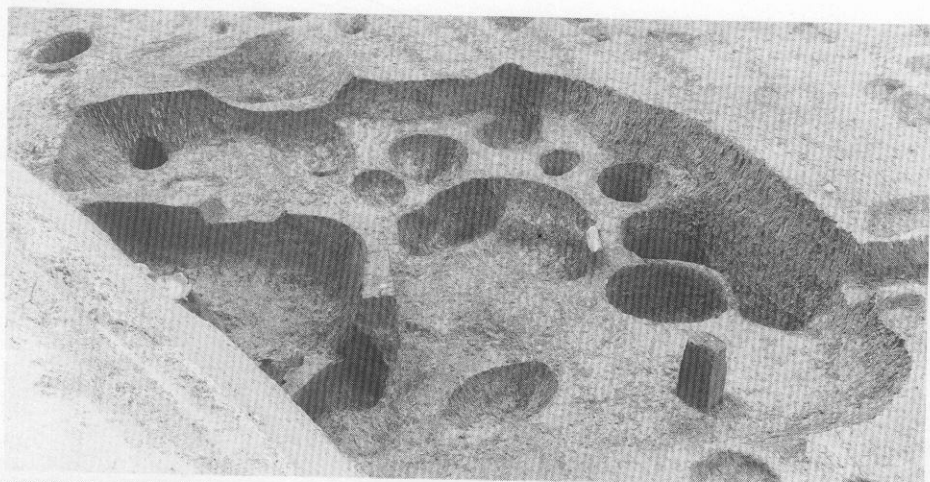
図 版



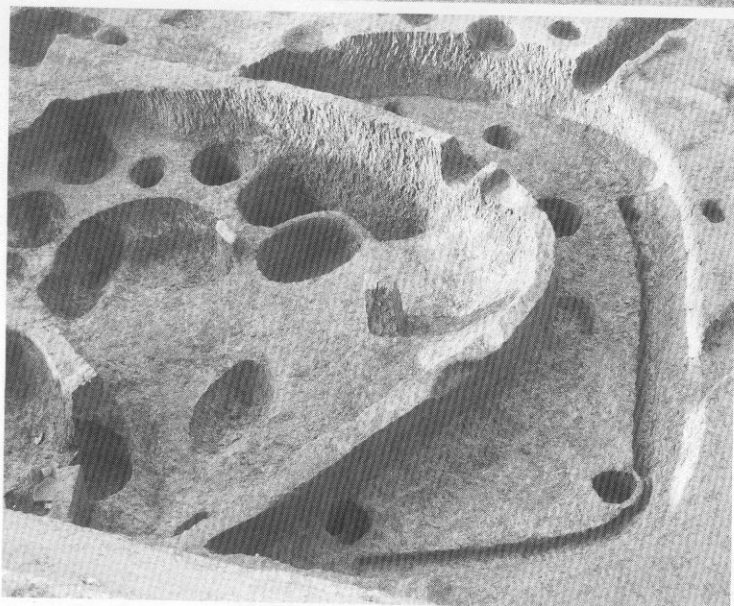
PL. 1 遺跡遠景



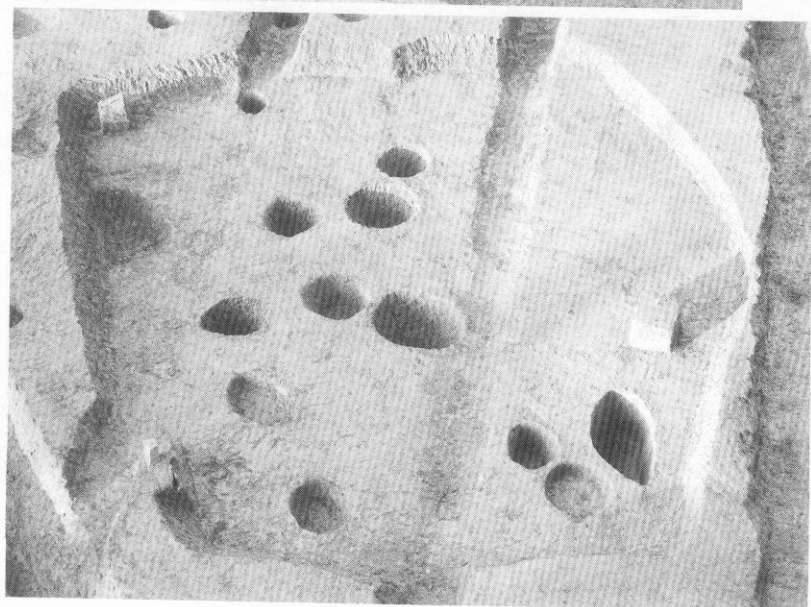
PL. 2 全景写真（東側・南側より）



1号住居跡



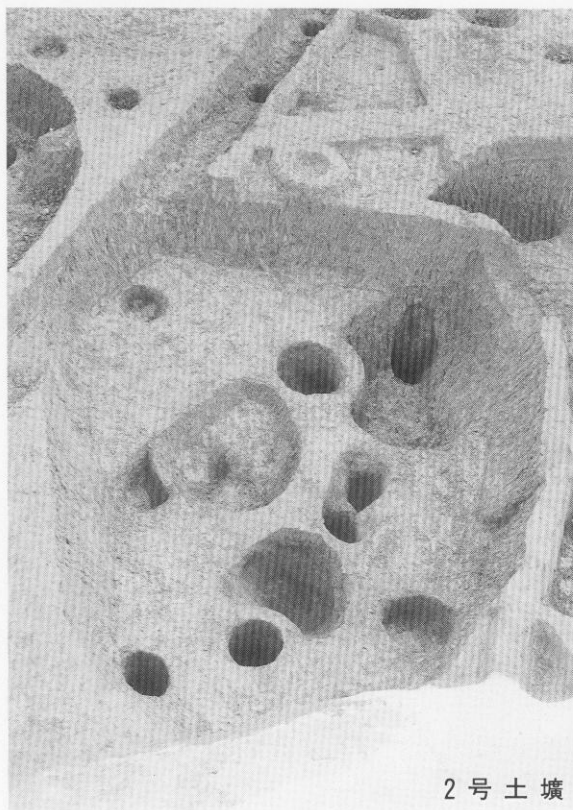
2号住居跡



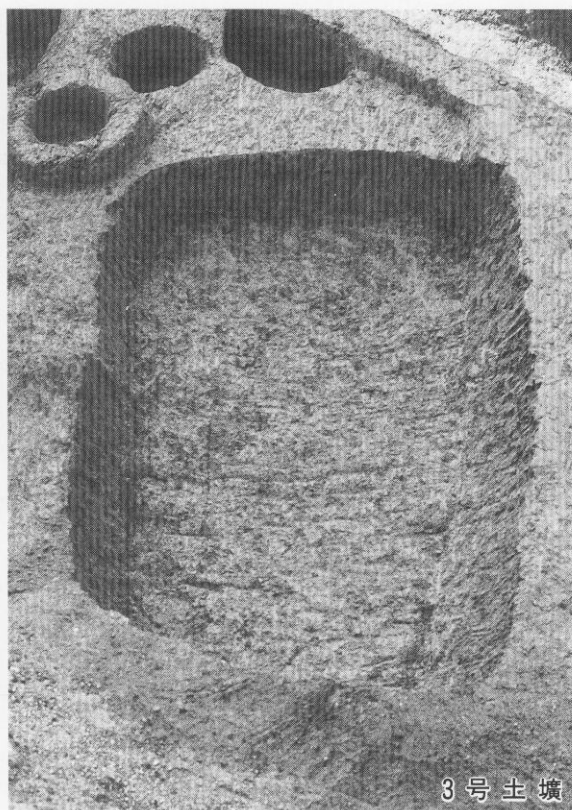
3号住居跡



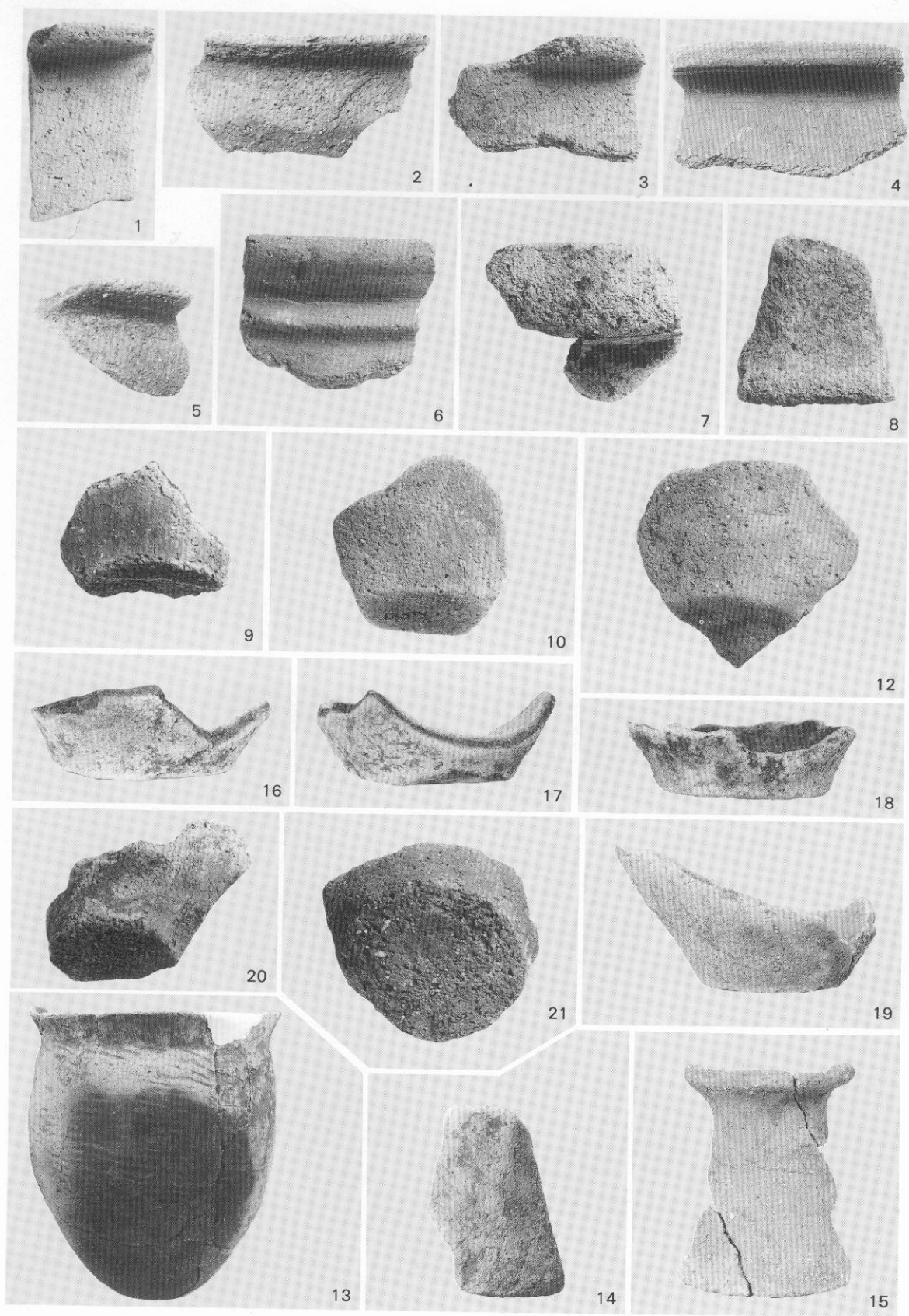
1 号 土 坑



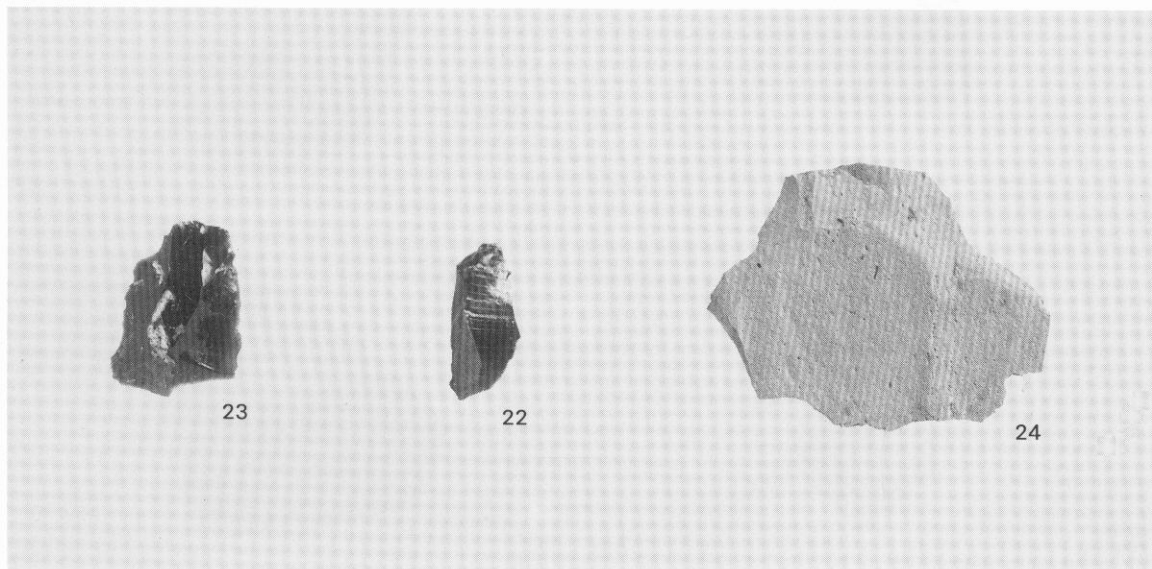
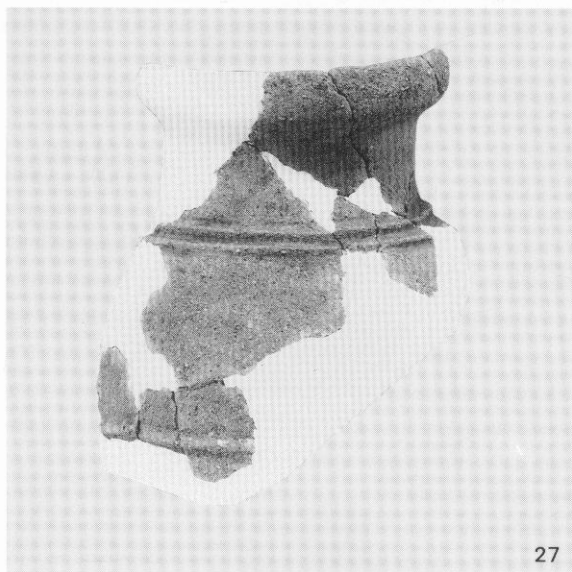
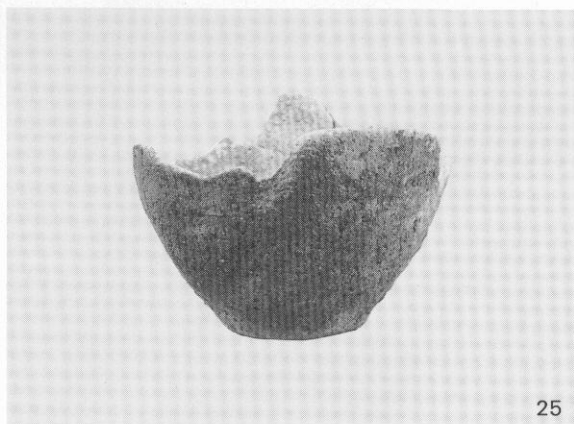
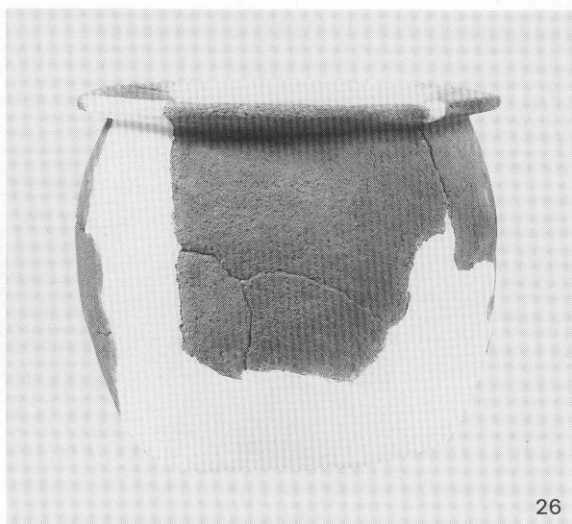
2 号 土 坑



3 号 土 坑



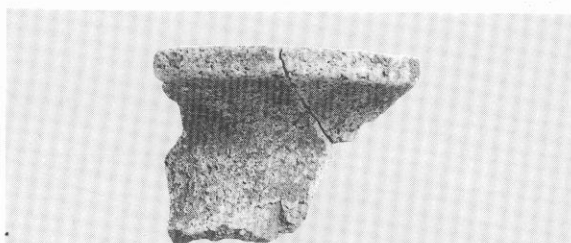
PL. 5 住居跡出土土器



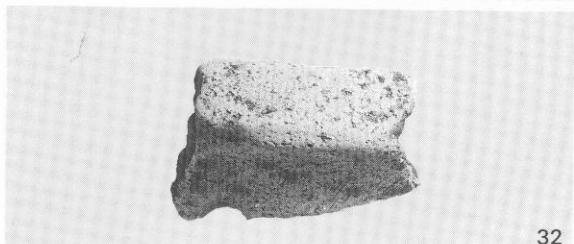
PL. 6 土城出土遺物



28



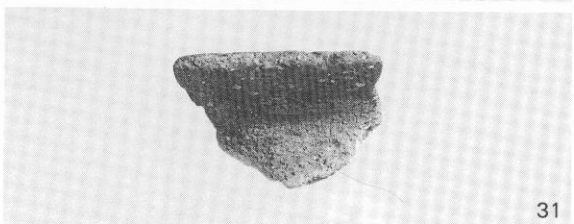
29



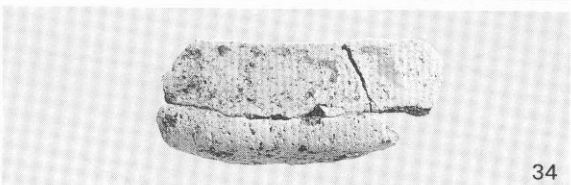
32



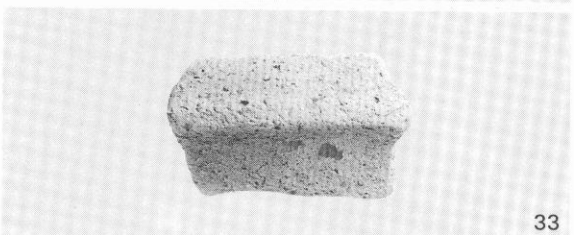
30



31



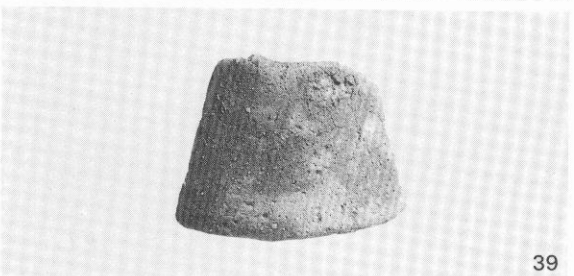
34



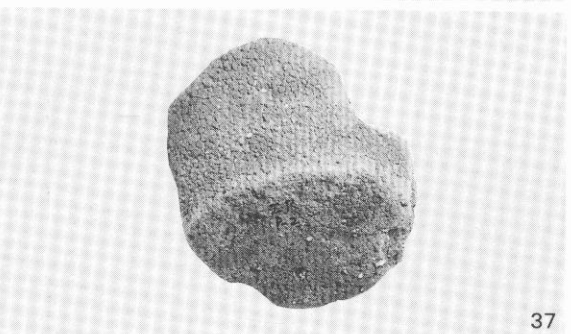
33



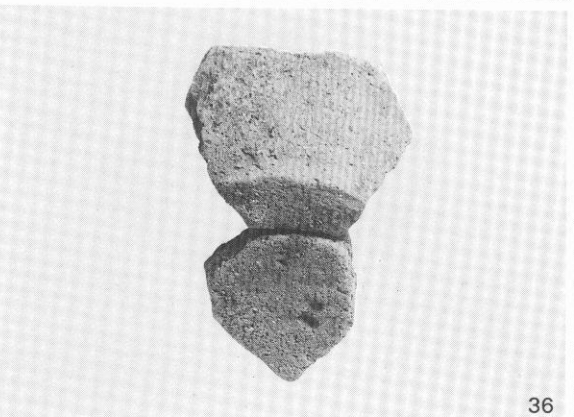
35



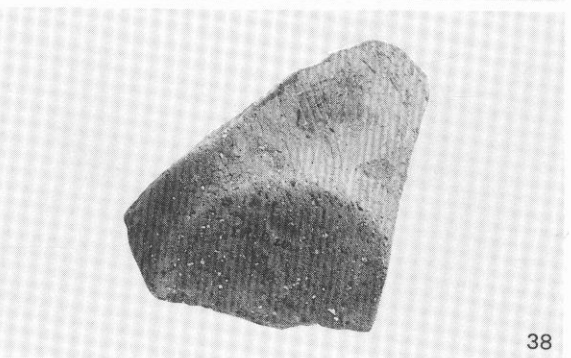
39



37



36



38

あ と が き

発掘調査にたずさわる者として、調査終了がすべての終りではありません。

調査によって出土した土器・石器や遺構などは、ものを云わない語り部です。

これらを現在・未来の人達に言葉に直して伝えていくことが私達の大きな役割だと思います。解釈していく中には独りよがりや思いちがいもあるでしょう。でも成果を報告して初めて先人達が生きてくるというのを絶対に忘れてはならないのです。

日々の仕事に追われ、つい足ぶみしたくなることも事実です。でも先人達の声なき声が悲痛な叫び声をあげている事を心に受けとめなければなりません。

たとえ事実報告でも独りよがりでも報告して初めて先人達が生きてくる。……

調査終了より1年、やっと報告書にたどりつきました。これは調査・整理に係わった人達の協力はもちろん、先人達の声なき声のお陰だと思います。この先人達に感謝をささげつつ終了報告いたします。

(K・W)

以 来 尺 遺 跡 II

筑紫野市大字筑紫所在遺跡調査

筑紫野市文化財調査報告書

第 39 集

発 行 筑 紫 野 市 教 育 委 員 会
福岡県筑紫野市大字二日市753-1

印 刷 株 式 会 社 川 島 弘 文 社
福岡市東区箱崎ふ頭六丁目6-41